

# 土井ヶ浜南遺跡第4次発掘調査—中世編—

小林善也

## 1. はじめに

この度の報告は、平成15年度に旧豊北町教育委員会（以下、町教委とする。）によって行われた土井ヶ浜南遺跡第4次調査の成果の一部である。現地調査が終了しすでに5ヶ年が経過したが、整理作業の遅滞からこれまでその調査成果を公開できずにいた。今回その成果の一部について公表できる段階に達したため、ここに当時の調査担当者としての責任を多少なりとも果しておきたい。

なお、今回の報告は中世の遺構と遺物である。本来、調査成果の中心となる古墳時代の遺物については、出土量が極めて多く未だ整理途上であるため報告できる段階に達していない。これについては、後日に期すことを許されたい。

## 2. 遺跡の位置と環境

### (1) 地理的環境

下関市豊北町は本州島の西北端、市域最北に位置し、響灘及び日本海に面する沿岸部から山間部までの標高1m～130mを主とする中山間地帯である。町域は東西約18km、南北約20km、面積は168.63㎡である。町域界は、東はザレ山（標高390m）、町域最高峰の白滝山（標高668m）、城山（標高376m）の連山を境として長門市（旧油谷町）並びに下関市豊田町域と接し、南は霊峰狗留孫山を中心とする山々を介して豊田町域及び下関市豊浦町域に接している。北は日本海、西は響灘に面し、町域北部から西部にかけては約35kmの湾曲に富む沈降海岸を形成している。北西には最短で約1.5kmの海士ヶ瀬戸を隔て角島があり、島は日本海と響灘に面する。内陸部は前述の山々から派生した幾筋もの低丘陵が無数に走る起伏に富んだ地形である。これらの丘陵は沿岸部にまで達し、大小の岬を形成する状況を普遍的に見ることができる。また、内陸部の丘陵の谷間には

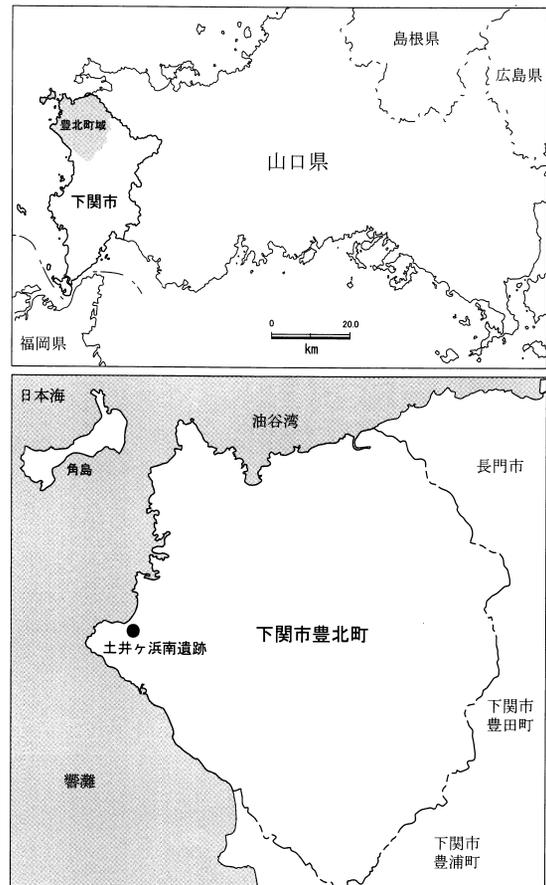


図1 下関市豊北町位置図

大小多くの河川が走り、それらのまとまりから栗野川水系栗野川、沖田川水系沖田川、荒田川水系荒田川、矢玉川水系矢玉川及びその支流、その他小河川流域の5つの水系単位に区分できる。

このように、豊北町域は山地や丘陵の占める割合が高いため低地がほとんど見られず、形成される低地も丘陵の合間をぬうように走る小河川の浸食作用を主として形成された狭長な谷底平野や狭小な盆地に限られている。そのため、現代の概耕地についても大半が河川周辺部に沿った狭長な低地と、海岸部を開けた狭小な低地に分散形成されている状況である。

土井ヶ浜南遺跡の所在する江尻下地区は響灘に面す豊北町の西端にあり、南北に弧状に延びる土井ヶ浜海岸の後背地に位置する。地区中央には土井ヶ浜海岸に向かって細長い丘陵が突き出し、その先端に形成された砂丘帯には土井ヶ浜遺跡が立地している。この砂丘帯の南側には沼川が土井ヶ浜海岸に向けて西流し、地区の南側には堂山（標高 134m）から派生した舌状の低丘陵が櫛歯状に展開している。土井ヶ浜南遺跡はこの堂山から派生した低丘陵に立地し、土井ヶ浜遺跡からは南に約 250m の距離にある。このような丘陵は、土井ヶ浜海岸を取り巻くように地区東および北側にも展開し、それらの谷の開析作用によって狭小な低地が形成され、現況その多くが水田として利用されている。

## （2）土井ヶ浜南遺跡の既往調査

土井ヶ浜南遺跡が所在する江尻下地区をはじめとする土井ヶ浜海岸周辺域は、豊北町のなかでも特に遺跡が密集する地域である（図 2）。

土井ヶ浜南遺跡はこれまで 5 次に渡る調査が実施されている。本遺跡の発掘調査は、土井ヶ浜遺跡の被葬者たちの集落を把握すること目的として、1991 年度（平成 3 年度）に山口県教育委員会によって実施された重要遺跡確認緊急調査を契機とする。丘陵先端部にあたるこの第 1 次調査では、弥生時代前期と古墳時代前半期の遺構・遺物が出土している（鈴木編 1992）。調査区域は近世以降の耕作による削平が著しく、遺構の残りは総じて不良であるものの、綾羅木Ⅱ～Ⅲ式相当の弥生前期土器や貯蔵用竪穴と推定される土坑が確認された。これにより当初の目的であった、土井ヶ浜遺跡の被葬者の集落の一つであることが確認された。

第 2 次調査は豊北町（当時）によって土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムを中心とした「土井ヶ浜弥生パーク」建設事業の一環としての進入道路建設が計画され、その工事に先立つ発掘調査として 1991 年度（平成 3 年度）に実施された（鈴木編 1993）。調査は町教委が山口県埋蔵文化財センターの技術支援を受けて実施された。本調査区は第 1 次調査区の北隣に位置し、第 1 次調査区でも確認されていた地形の大きな落ち込みが改めて確認されたことで、前調査区からの一連の地形であることが明らかとなった。しかし、第 1 次調査で確認された土井ヶ浜遺跡と同時期の遺構は確認されず、遺構としては中世の柱穴が主体であった。成果の中心としては地形の落ち込みに厚く堆積した包含層からの出土遺物である。この包含層からは、古墳時代前半期と中世前半期を主体とする土器が多く出土し、土井ヶ浜南遺跡には古墳時代前半期と中世前半期にも盛行期があることが明らかとなった。また、中世の遺物包含層からの出土ではあるが縄文時代前期の曾畑系の土器片が 10 点出土し、土井ヶ浜周辺における人間活動が縄文時代前期に遡る可能性が示唆された。

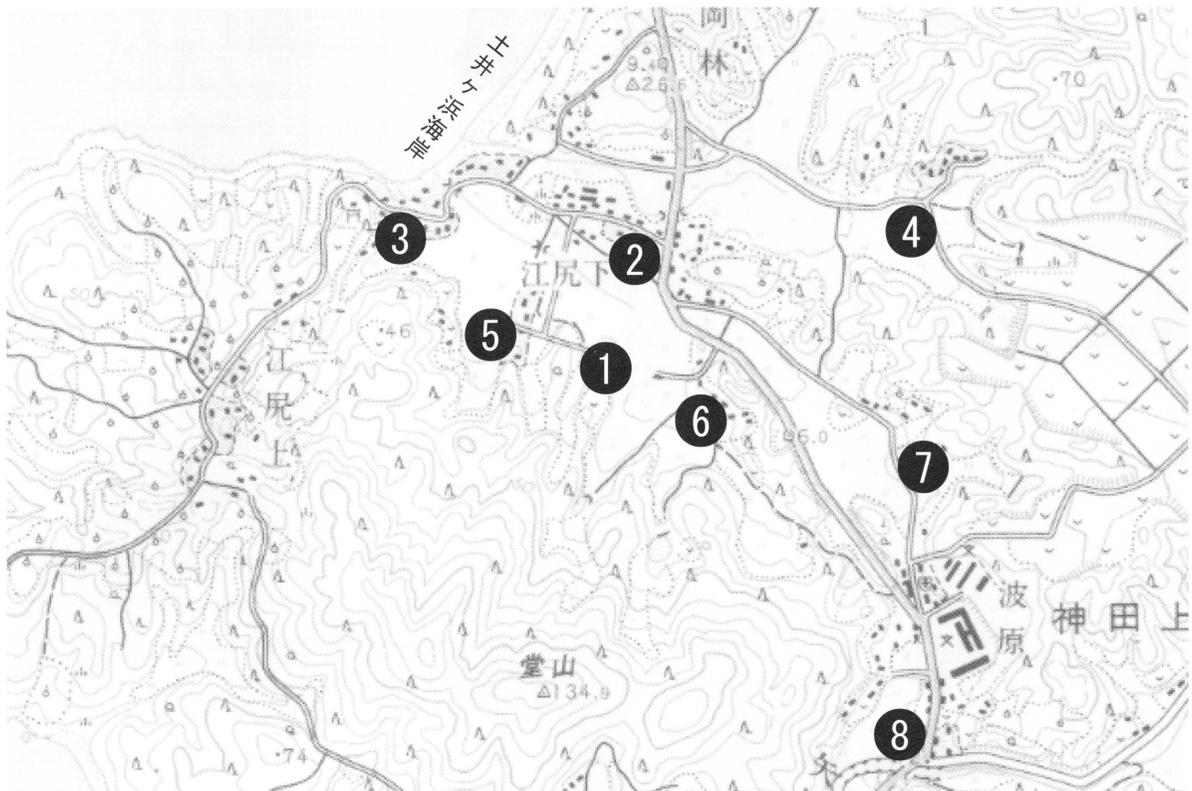
第 3 次調査は土井ヶ浜南遺跡の性格を明確にすることを目的として、1999 年度（平成 11 年度）に町教委（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）によって実施された（古庄 2000）。調査規模は小さく、幅 2 m、長さ 20m 程度のトレンチ 2 本による調査である。調査区は第 1 次調査区と第 2 次調査区の間位置する。主な遺構としては中世の柱穴が主体であったが、ここでも第 2 次調査時に確認された丘

陵の落ち込みが確認され、5世紀前半を主体とする極めて多量の土器が出土した。器種としては、高坏、小型丸底壺、手捏ね土器が目立ち、完形率も高い。これらは丘陵の地山が落ち込む変換点からまとまって出土し、なかには原位置を保つとみられる個体もみられた。その他、精巧に造られた滑石製模造鏡も出土している。このような遺物の出土状況は古墳時代中期の集落内祭祀の一形態を示す事例と考えられる。また、中世においては「かわらけ溜まり」とされる大型の土坑から「此方牛□□□（頭天王）」「東宮」「壬」と墨書された土師器皿が出土し、共伴した土師器などと勘案し12世紀後半と推定されている。このような祭祀性に富む調査成果によって、古墳時代や中世の土井ヶ浜南遺跡が政治的にも重要な位置を占めていた可能性が示唆されることとなった。

第5次調査は、国営農地再編整備事業（圃場整備事業）に伴う発掘調査が町教委（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）により平成15年度（2003年度）に実施され、<sup>1)</sup>



写真1 土井ヶ浜南遺跡周辺の地形と遺跡分布（2003年4月）



- 1. 土井ヶ浜南遺跡
- 2. 土井ヶ浜遺跡
- 3. 宮ノ下遺跡
- 4. 片瀬遺跡
- 5. 松成遺跡
- 6. 切畑遺跡
- 7. 森広遺跡
- 8. 波原遺跡

図2 土井ヶ浜周辺の遺跡の位置（1/25,000）

調査時期は第4次調査と併行して行われている（有福編 2005）。調査面積は約 6,200 m<sup>2</sup>で既往の調査のなかでは最も広い。この調査によって、丘陵先端から東斜面にかけての遺跡の全容が明らかになり、土井ヶ浜南遺跡が弥生時代から中世にかけて断続的に集落形成されていたことが明確となった。弥生時代では第1次調査の成果をさらに面的に確認することができ、前期の遺構・遺物が丘陵先端部に主体的に分布することや、遅くとも中期初頭には集落が途絶えることが明らかとなった。さらに、縄文時代晩期前葉～終末にかけての土器が少量ながらも出土したことは、角島の沖田遺跡と同様に、土井ヶ浜弥生人の生成問題を考える上でも見逃せない重要な成果である。弥生時代終末から古墳時代初頭には再び集落を形成し、丘陵の奥（南）にも遺構・遺物が主体的に分布し周溝をめぐる大型の竪穴住居が確認されている。この時期には 400m 西に位置する宮ノ下遺跡でも竪穴住居や多量の土器が出土している。続く古墳時代中期にかけても一定量の遺物が出土しており、3次調査の成果からも集落として機能していたことがわかる。ただし、この時期の遺構は疎らで、居住域としての役割は希薄である。以降、古代～中世には多数の柱穴が確認され、掘立柱建物跡などが確認されるが、各遺構の時期は明確ではない。遺物の様相からみれば、8～9世紀代の須恵器をはじめ、緑釉陶器、製塩土器、刻書された土師器坏など政治的色彩の強い遺物が出土している。また、中世ではC～D期、特にD期の輸入陶磁器が顕著に出土し（山本・山本 2007）、屋敷墓とみられる土葬土坑墓や仔ウマの埋葬跡などが確認されている。

このように、古代以降の土井ヶ浜南遺跡は政治的・祭祀的行為を強く窺わせる遺構や遺物が確認されており、この時期の遺跡の性格を明らかにすることが重要なテーマとなっている。周辺遺跡の調査成果をみても、宮ノ下遺跡では3点の銅製帯金具（鉸具・巡方・丸柄）、権とみられる鐔形石製品、硯、製塩土器などが出土している。近接する松成遺跡<sup>2)</sup>でも石製帯金具が出土し、谷開口部に位置する湿地帯からは人や牛馬の足跡を残す古代～中世の水田跡が確認されている。また、波原遺跡では菊花双鳥鏡を埋納した遺構が確認され、その周囲には土坑墓の可能性のある遺構が複数確認されている。このような周辺遺跡の成果を踏まえれば、古代～中世における土井ヶ浜周辺が政治的に重要な位置を占めていたことがわかる。このことは古代律令制度の地方への浸透度合いや、荘園制度の盛衰をはじめとする在地豪族あるいは領主層の土地の所有にかかわる争い、それに伴う耕地開発に関連した動きが反映された結果とみることができる。

以上、既往の調査成果を概述した。これを踏まえて、以下に第4次調査の成果を報告したい。

### 3. 第4次調査の概要

調査は個人住宅の建設に先立ち平成15年7月8日から平成15年10月2日にかけて行った。そのため、寺ヶ浴遺跡および広田遺跡として調査が行われた第5次調査と調査期間が併行する。また第4次調査区は、平成11年度にトレンチ調査を実施した第3次調査地点を包括するものである。

発掘調査にあたっては、調査対象区域とその周辺に平面直角座標系（第Ⅲ系）によるトラバース測量を行い、基準点を設定した。調査の基本的な方法としては、まず重機により耕作土を除去したのち、第3次調査で得られた情報をもとに調査対象遺構面までの堆積土を除去した。その後、人力により遺構の検出、確認、掘り込みをおこない、調査の進行に応じて適宜個別遺構および遺構面全域の遺構分布状態を写真（35 mm版モノクロ・カラー・カラーリバーサル）と図面（1/10、1/20）により記録し、

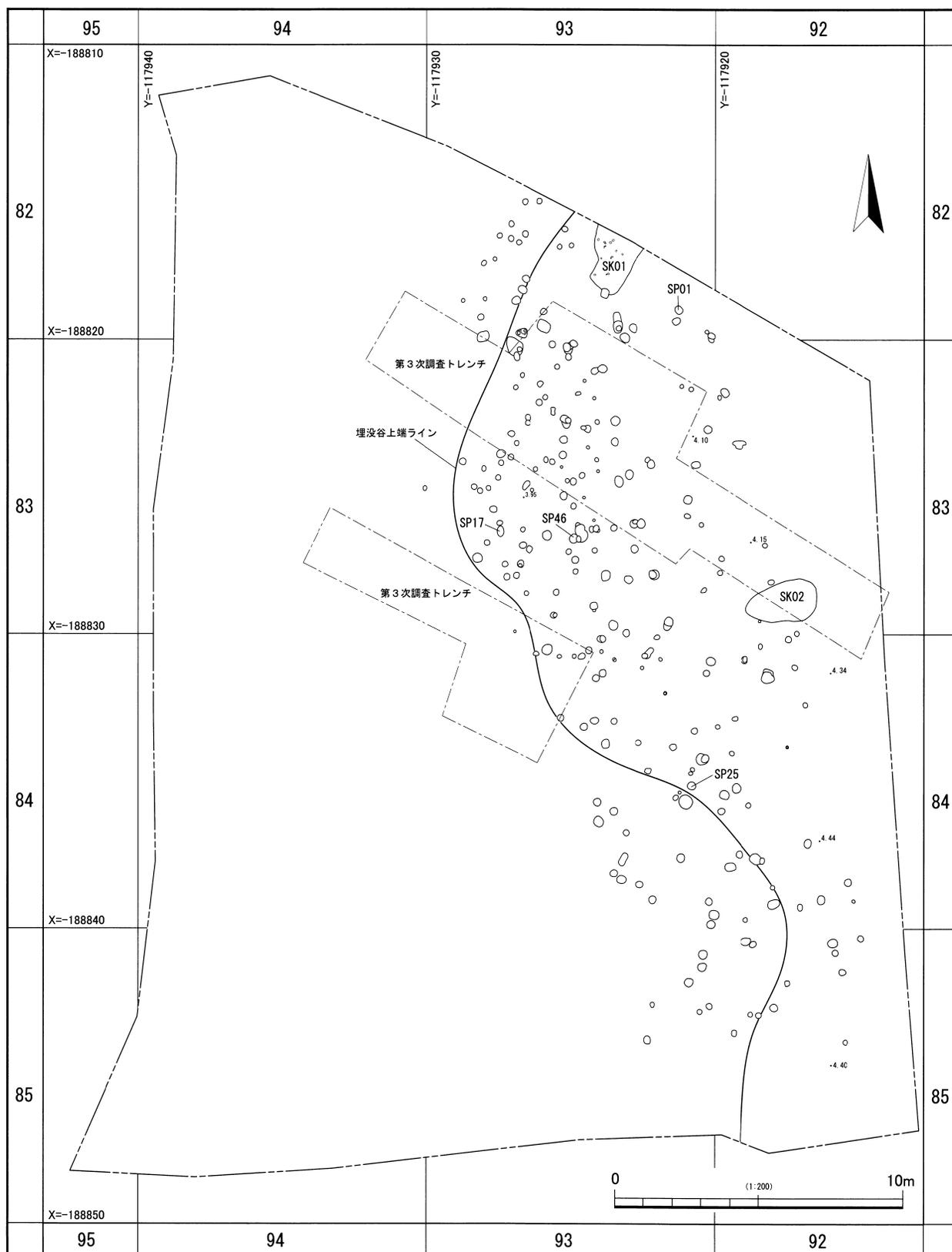


図3 土井ヶ浜南遺跡第4次調査区遺構配置図 (1/200)

調査における最終地形を検出した段階で現地調査を終了した。

出土した遺構・遺物は、柱穴およそ320個、土坑2基など中世の遺構が出土したほか、埋没谷地形からは古墳時代前期～中期にかけての土器が多量に出土した。出土遺物および記録資料は土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムで保管している。

なお、調査にあたっては、第3次調査時のトレンチ位置と当時の検出遺構の把握も目論んだが、トレンチ1の西北端のプランとそこから出土した「かわらけ溜まり」と称される土壌を再確認することができなかった。

特に、「かわらけ溜まり」と称される土壌は大型で深度も深い遺構であるため人為的な掘削時に見落とす可能性は低く、重機による遺構検出の際に削剥した可能性がある。いずれにせよ担当者の至らなさが原因と考える他はなく、深く反省する次第である。



写真2 調査区完掘状況（南から）

#### 4. 調査の成果

##### 1) 層 序 (図4・写真2～3)

ここでは調査区北壁の土層を基にして、本調査区の基本層序について述べたい。

本層準は細別29層に分けることができるが、これらを整理し大別するとⅠ層(1a～2b)、Ⅱ層(3)、Ⅲ層(4a～7)、Ⅳ層(8a・8b)、Ⅴ(9a～10)、Ⅵ層(11～16)、Ⅶ層(17)の7層に大別することができる。

Ⅰ層(1a～2b)は近～現代の客土層である。

Ⅱ層(3)は水田床土である。この水田造成によって、地山面が大きく削平されたと考えられる。出土遺物が無く、時期を明確にできないが、江戸期を遡ることはなからう。

Ⅲ層(4a～7)は粗粒砂～細礫や炭化物を含みマンガン粒や褐色斑がみられる褐灰～黒褐色の砂質粘土質シルトで構成され、有機物の分解が進行し腐植性のある堆積層である。このような堆積層が薄く重層していることから、基本的に



写真3 調査区北壁土層1（南西から）



写真4 調査区北壁土層2（南から）

は耕作地の形成と維持管理のための削平や盛土が繰り返される過程で堆積した層準と考えられる。出土遺物から中世前半の堆積層であろう。

IV層 (8a・8b) は黄褐色の砂質粘土質シルトからなり、非常に締まりの強い堆積層である。さらに、鉄分が強く花崗岩起源の地山に由来するとみられるクサリ礫や褐色斑粒を含み、無遺物層という特徴がみられる。本層準は他の堆積層とは明らかに異質な層相を示し、人為的な客土層の可能性はある。時期的には、IV層以下で中世遺物の出土がみられないため、中世集落形成初段階の土地造成に由来する堆積層の可能性はある。

V層 (9a～10) は黒褐～暗灰色を呈す粘土質シルトで構成された植物遺体を含んだ粘性ある堆積層で、多量の土器を包含する。出土した土器から古墳時代前期～中期の堆積層と考えられる。ここから出土した土器は完形に近いものが目立つ。

VI層 (11～16) は黒褐～暗灰色の砂質泥で構成された強粘性の堆積層である。おそらく、縄文海進以降の海退現象のなかで形成された堆積層と推察され、少なくとも弥生時代までは断続的に湿潤な土壌が生成されていたと考えられる。

VII層 (17) は黄灰～灰黄色を呈す砂質粘土質シルトからなる地山で、強く締まりのある堆積層である。花崗岩起源の地山で、鉄分に富んでいる。遺構検出面では、いわゆる高師小僧（植物の根の周りに、鉄分が結

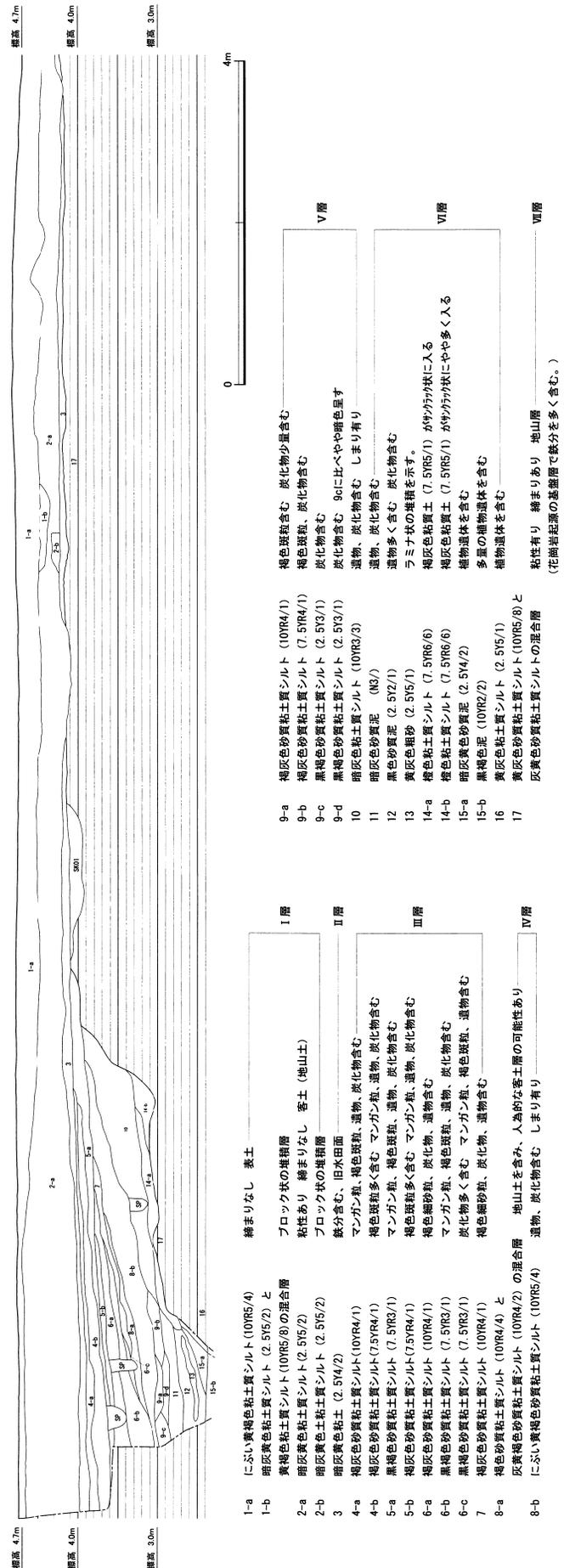


図4 調査区北壁土層 (1/80)

集してできた円筒状の鉦物)とされる褐鉄鉦が多くみられた。

## 2) 中世の遺構と遺物

以下に、主な遺構と遺物について述べる。

### (1) 土 坑

#### SK01 (図5・写真4~5)

グリッド 9382 に位置する。遺構の一部は調査区外にかかるため、全容は不明である。調査区内における平面形は不整形を呈す。上面は削平を受け、残存規模は東西軸が最長 170 cm、南北軸が最長 170 cm である。埋土は黒褐色砂質粘土質シルトの単層で炭化物、マンガン粒および黄橙色の地山ブロックを含む。平面形検出時や土層断面にて別遺構の切り合いの有無を精査したが、確認には至らなかった。ただし、完掘状況からは、複数の遺構が切り合っている可能性は否定できない。遺物はおもに遺構の北東側にまとまって出土した。

#### 出土遺物 (図6・写真6)

1~4 は土師器の皿。1 は推定口径 7.7 cm、底径 5.3 cm、器高 1.6 cm である。体部が直線的に立ち上がり、口縁端部は若干外上方に摘み出す。内外面とも回転ナデ調整であるが、底部内面に工具による調整痕と考えられる浅い渦巻き状の沈線が残る。底部は回転糸切りである。色調は灰白色を呈し、器表面に僅かに赤彩の痕跡が残る。2 は口径 8.6 cm、底径 4.5 cm、器高 1.7 cm である。体部は直線的に立ち上がるが、強い回転ナデによって凹凸が明瞭で、器壁は薄い。口縁端部は上方に摘み出している。内面調整も強い回転ナデによって同心円状の凹凸が明瞭である。底部は回転糸切りである。焼成は

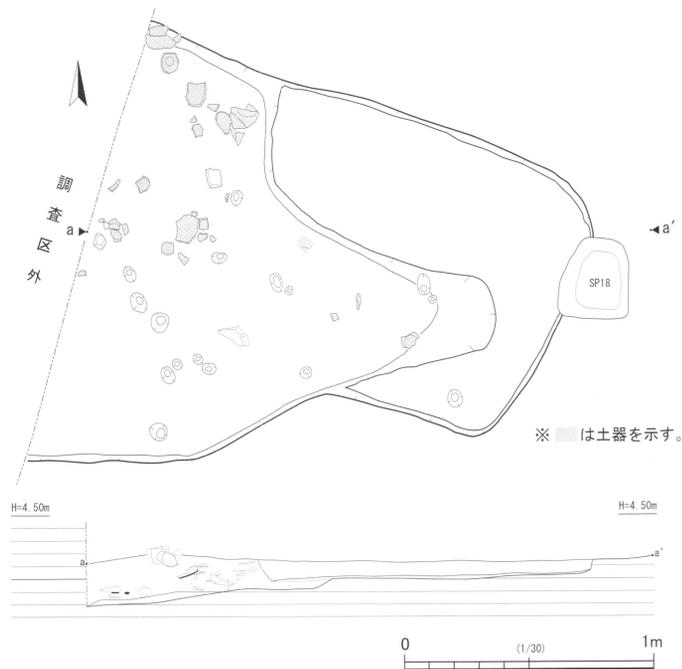


図5 SK01 実測図 (1/30)



写真5 SK01 土層 (南西から)



写真6 SK01 遺物出土状況 (西から)

良く焼け締まり、硬質である。胎土は非常に精良、赤色微細粒子が目立つ。色調は器表面が赤彩されているが、胎土は浅黄橙色を呈す。精製品である。3は推定口径9.0 cm、底径6.0 cm、器高1.4 cmである。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は若干外上方に摘み出す。底部内面は強い回転ナデによる同心円状の凹凸がみられ、中心部は静止ナデでにより凹む。底部は回転糸切りで、板目痕がみられる。器表面は赤彩されるが、胎土は白色を呈す。4は推定口径9.3 cm、推定底径5.8 cm、器高1.6 cmである。体部は内湾気味に凹凸をもちながら立ち上がり、口縁部は肥厚させる。器壁は比較的薄い。

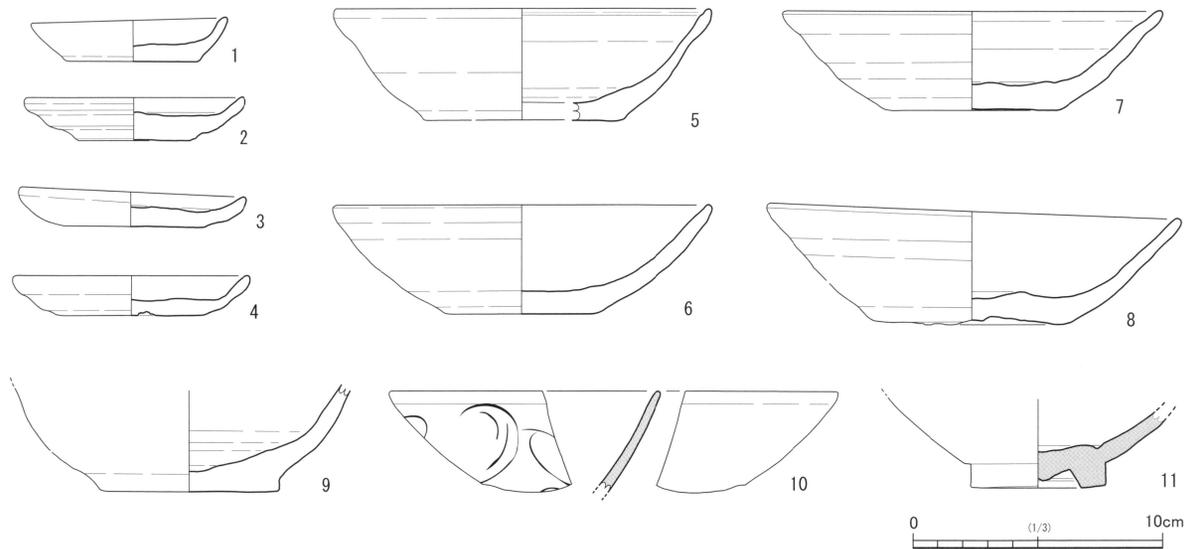


図6 SK 01 出土遺物実測図 (1/3)

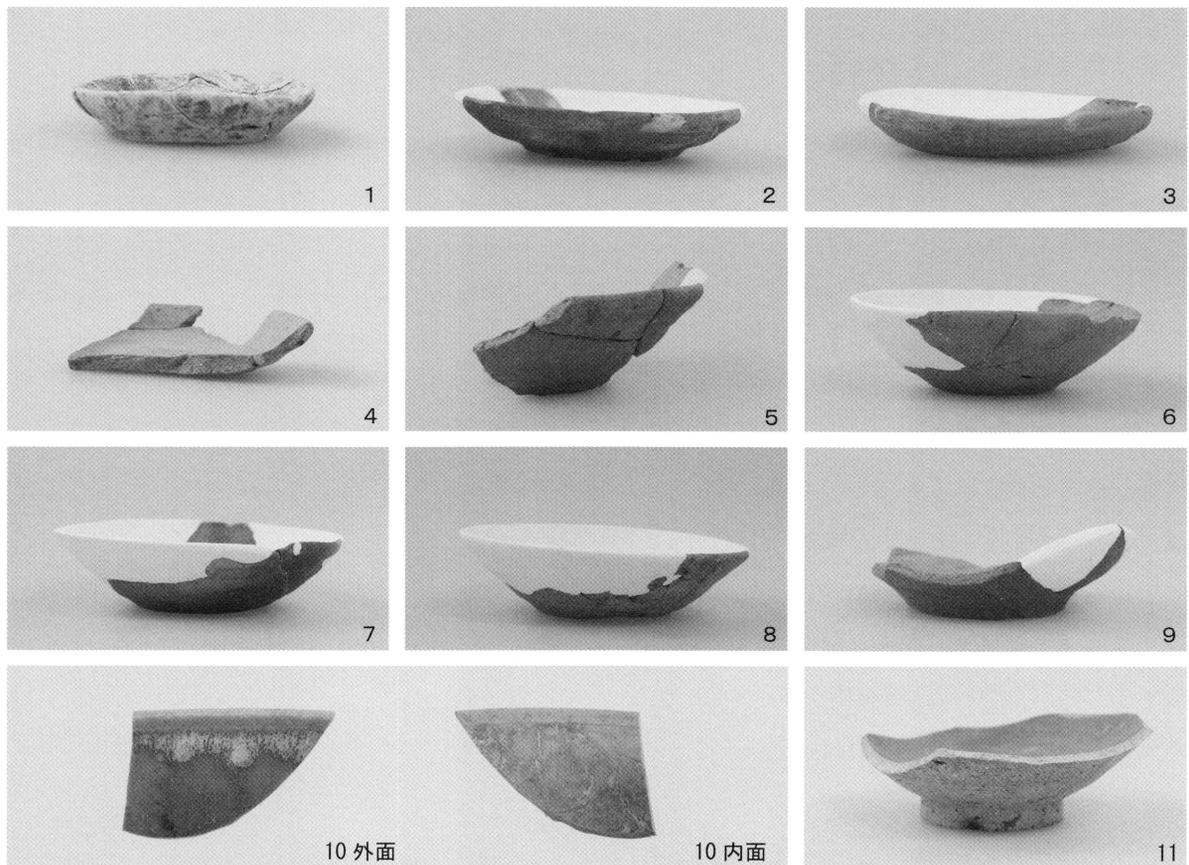


写真7 SK 01 出土遺物

※写真の遺物番号は、実測図の遺物番号に対応。

底部内面の中心部は押圧静止ナデでにより凹む。胎土に赤色微細粒子が目立つ。焼成は良く焼け締まり、硬質である。色調は浅橙色を呈す。

5～9は土師器の坏。5は推定口径15.0cm、推定底径8.0cm、器高4.4cmである。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で外に開く。口縁部は肥厚し、端部内面は先端を上方に摘み出すための強い回転ナデによる段がみられる。底部内面は強い回転ナデによる同心円状の凹凸がみられる。底部は回転糸切り。色調は橙色を呈す。6は推定口径15.0cm、推定底径6.0cm、器高4.3cmである。体部は内湾気味に立ち上がる。内外面回転ナデ調整で、体部の厚みは均質である。口縁端部は面を取るような形状で、内面は先端を上方に摘み出すための回転ナデによって、僅かに凹む。底部は回転糸切りである。色調は橙色を呈す。7は推定口径15.2cm、底径7.0cm、器高3.9cmである。体部は直線的に立ち上がるが、強いナデによって段状を呈す。口縁部は外に開き、端部は丸く収める。底部内面は強い回転ナデによって同心円状の凹凸が明瞭である。稜が鋭いため工具を用いたナデである可能性が高い。中心部は押圧静止ナデにより凹む。底部は回転糸切りであるが、板目痕がみられる。色調は黄褐色を呈す。8は推定口径16.3cm、底径7.8cm、器高4.5cmである。体部は直線的に立ち上がるが、回転ナデによる弱い凹凸がみられる。口縁端部は丸く収めてはいるが、面を取るような形状を残す。体部の厚みは均質で薄い。底部内面は強い回転ナデによる同心円状の凹凸がみられ、中心部は押圧静止ナデにより凹む。底部は回転糸切りであるが、切り離しが雑で上げ底となる。板目痕がみられる。色調は浅橙色を呈す。9は底径7.2cm、残存高4.1cmである。やや台状を呈する底部から、体部が内湾しながら立ち上がる。口縁部は欠損するが、体部上半で外反傾向がみられることから、口縁部は外に開く形態であろう。底部内面は強い回転ナデによる同心円状の凹凸がみられる。底部は回転糸切りであるが、板目痕がみられる。胎土に赤色粒子が含まれる。色調は橙色を呈す。

10・11は青磁碗。10は口縁部片である。外面は無文、内面に片彫蓮花文を施す。釉は薄く、青みを帯びた緑色を呈す。龍泉窯系青磁碗I-2類であろう。11は底部～体部下半である。残存する体部下半は無釉であるが、上端部に釉の痕跡が僅かに認められる。内面は黄色味のある緑色釉が薄く施される。内面は無文で、見込みと体部との境界に明瞭な段がみられる。底部は肉厚で逆台形状を呈す。同安窯系青磁碗II類であろう。

**SK02 (図7・写真7～9)**

調査区北東部のグリッド9283に位置する。東西に軸をとる長径250cm、短径140cmの平面楕円形を呈する土坑で、深さ約15cmである。埋土は2層からなり、I層は明褐色粘砂質土と灰白色粘砂質

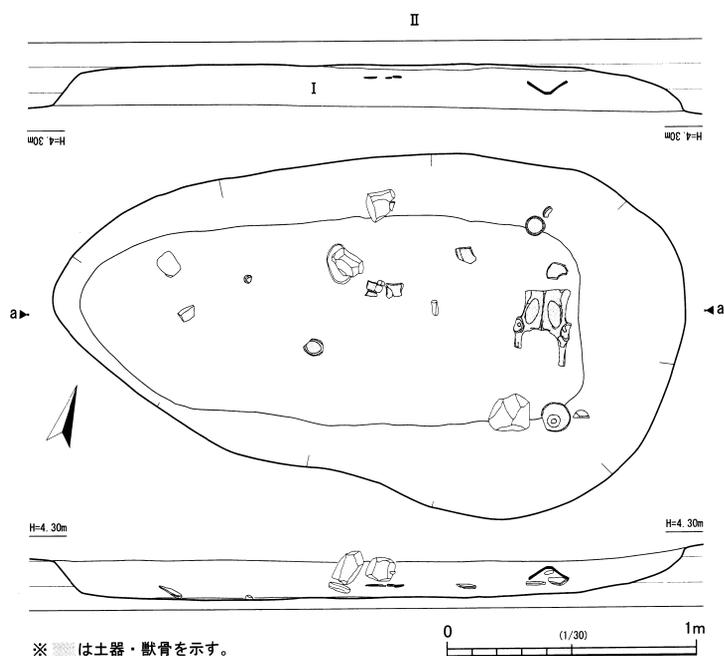


図7 SK02 実測図 (1/30)

土からなる地山ブロックと黄灰色粘土質シルトが混在した堆積土である。Ⅱ層は灰色粘土質細砂が薄く堆積する。なお、Ⅰ層の粘性の強い黄灰色粘土質シルトは有機物が腐植することで形成された可能性が示唆される。

遺物はⅠ層から出土し、ほぼ完形の坏と皿を含む土師器が土坑東側を中心に散在し、東端にはウシ寛骨が据え置かれたように出土した。土坑の規模や出土遺物、さらにはⅠ層の黄灰色粘土質シルトの堆積状況などから、土葬木棺墓の可能性がある。なお、本遺構の解釈については本誌掲載の沖田絵麻氏の論考を参照されたい。

#### 出土遺物 (図8・写真10)

12～16は土師器皿。12は推定口径6.8cm、底径5.5cm、器高1.1

cmである。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。底部内面はナデが強く、同心円状の凹凸が見られる。また、回転糸切りが雑なために底部が段上に残り器壁が厚い。色調は浅黄橙色を呈す。13は口径7.0cm、底径5.0cm、器高1.1cmである。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。底部内面は回転ナデが強く、同心円状の凹凸が見られる。また、回転糸切りが雑なために底部が段上に残り器壁が厚くなっている。色調は浅黄橙色を呈す。14は口径7.4cm、底径5.7cm、器高1.1cmである。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。体部の器壁は厚い。底部内面は回転ナデが強く、同心円状の凹凸が見られる。回転糸切りが雑なため、底部の一方が段状を呈する。そのため、器壁の厚さも一定ではない。色調は浅黄橙色を呈す。15は口径7.2cm、底径5.3cm、器高1.1cmである。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。底部内面は中央部が凹む。色調は浅黄橙色を呈す。16は口径7.2cm、底径5.6cm、器高1.2cmである。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。底部内面は回転ナデが強く、同心円状の凹凸が見られる。特に、体部との立ち上がり部分はナデが強く施され、凹みが明瞭である。色調は浅黄橙色を呈す。

17～21は土師器坏。17は推定底径7.0cm、残存高1.9cmである。器壁が薄く、体部は内湾気味に立ち上がる。底部内面の中心部は凹む。底部は回転糸切りである。焼成は良く焼き締まり、硬質である。色調は浅黄橙色を呈す。18は推定口径11.0cm、推定底径5.0cm、器高3.5cmである。器壁が薄く、体部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収める。底部内面の中心部は凹む。底部は回転

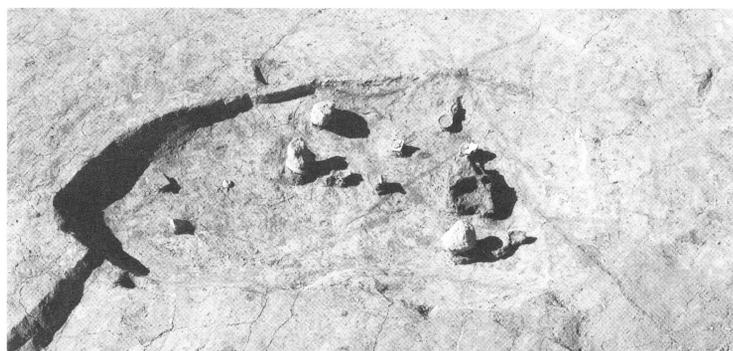


写真8 SK 02 遺物出土状況 (南から)



写真9 SK 02 土層1 (南から)

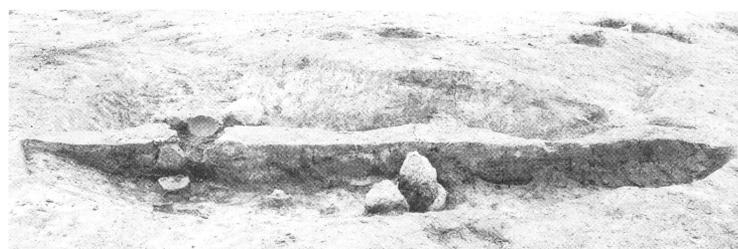


写真10 SK 02 土層2 (北から)

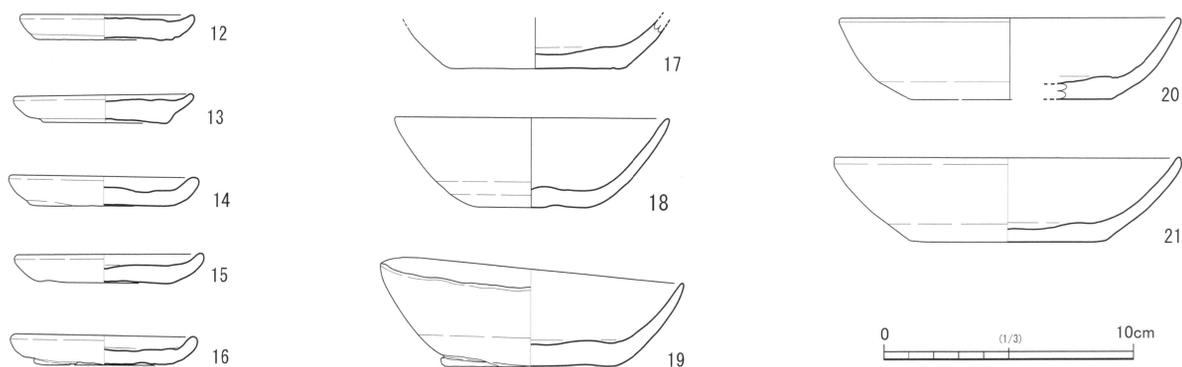
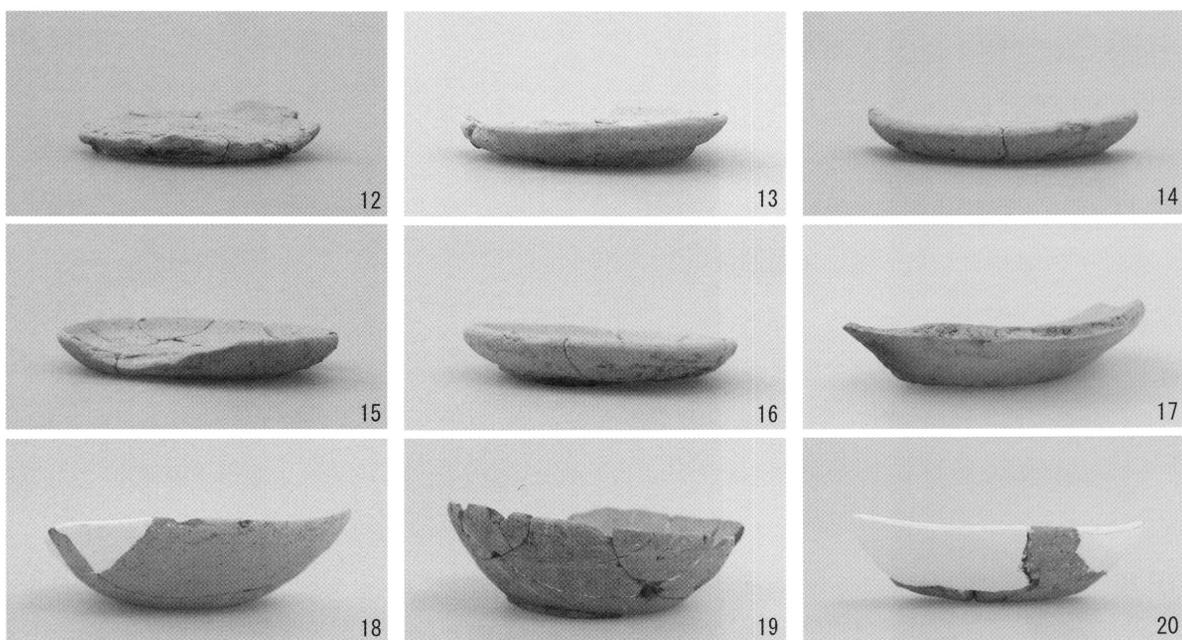


図8 SK 02 出土遺物実測図 (1/3)



※写真の遺物番号は、実測図の遺物番号に対応。

写真11 SK 02 出土遺物

糸切り。焼成はよく焼け締まり、硬質である。色調は浅黄橙色を呈す。19は口径12.1cm、底径6.8cm、器高3.1～4.0cmである。成形が悪く、均質な形態を成さない。器壁は薄く、体部

は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は尖り気味に収める。底部内面は緩やかな凹凸がみられる。色調は橙色を呈す。20は推定口径13.5cm、推定底径8.0cm、器高3.2cmである。体部下半に弱い稜をもち、内湾気味に立ち上がる。口縁部は若干外に摘み出し、端部は丸味を帯びる。底部内面は体部との境界に強い回転ナデが施され、凹む。底部は回転糸切りである。胎土に砂粒が多く含まれる。特に、0.5mm以下の微砂粒の混入が顕著で、器表面はこの微砂粒の剥落痕が非常に目立つ。色調はにぶい黄橙色を呈する。21は推定口径13.8cm、推定底径7.8cm、器高3.2cmである。胎土に赤色粒子を含む。体部下半に弱い稜をもち、内湾気味に立ち上がる。口縁端部は上方に摘み出し、尖り気味に収める。底部内面は回転ナデによる同心円状の凹凸がみられる。底部は回転糸切り。色調は橙色を呈する。

## (2) 柱 穴

今回の調査では約320の柱穴が確認された。そのうち、遺物が出土したのは148であるが、大半

が細片で、図化可能な遺物は8点に過ぎない。また、建物跡を構成する柱穴も確認されなかった。以下に、意図的に遺物を納めた可能性のある柱穴について述べる。

**SP 01 (図9・写真 11)**

グリッド 9382 に位置する。平面形は約 25 cm× 30 cm の円形を呈し、深さは約 23 cm。埋土は黒褐色砂質粘土質シルトの単層で炭化物を少量含む。柱痕跡や抜き取り痕は確認されなかった。柱穴中位から土師器坏 (25・26) が出土した。

**SP 17 (図9・写真 12)**

グリッド 9383 に位置する。平面形は約 25 cm× 36 cm の楕円形を呈し、深さは約 19 cm である。上部は削平を受けたと考えられる。埋土は黒褐色砂質粘土質シルトの単層で炭化物を少量含む。柱痕跡や抜き取り痕は確認されなかった。遺物は土師器皿 (22) が底に貼り付いた状態で出土した。

**SP 25 (図9・写真 13)**

グリッド 9384 に位置する。平面形は約 27 cm の円形で、深さは約 13 cm である。上部を大きく削平された可能性が高い。埋土は黒褐色砂質粘土質シルトの単層で炭化物を少量含む。柱痕跡や抜き取り痕は確認されなかった。柱穴の上位から土師器坏 (26) が出土した。

**SP 46 (図 10・写真 14)**

グリッド 9383 に位置する。平面形は約 27 cm× 34 cm の楕円形で、深さは約 29 cm である。埋土は黒褐色砂質粘土質シルトの単層で炭化物を少量含む。柱痕跡や抜き取り痕は確認されなかった。柱穴の上位から土師器鍋 (27) が出土した。

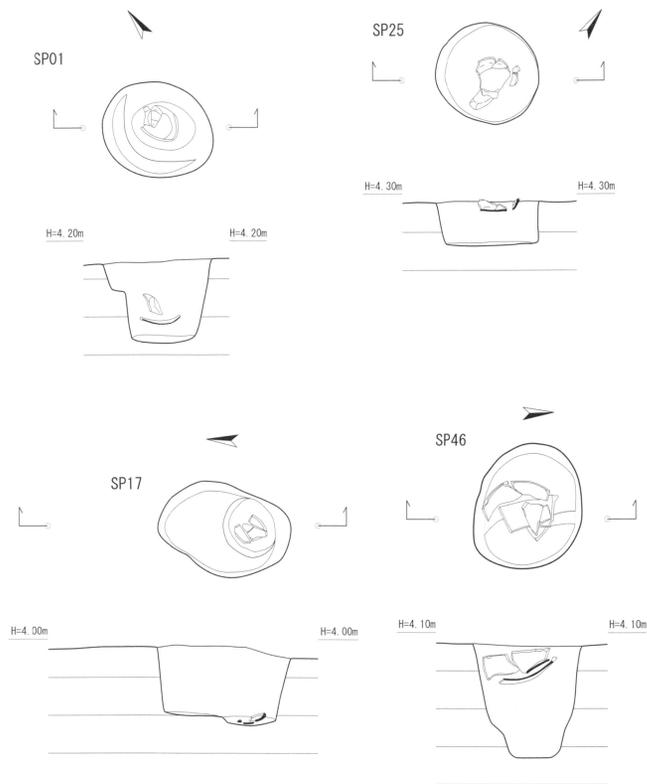


図9 柱穴実測図 (1/20)



写真 12 SP 01 遺物出土状況

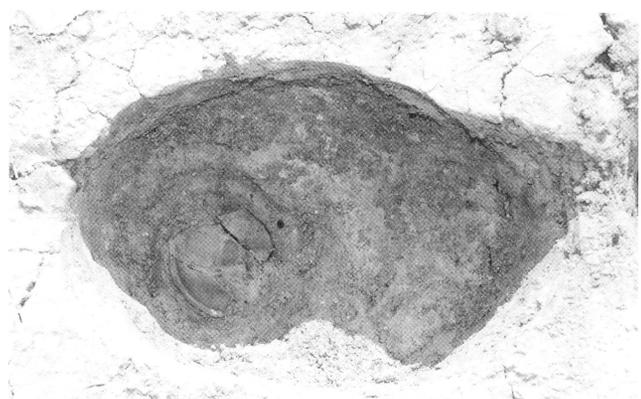


写真 13 SP 17 遺物出土状況

柱穴出土遺物（図10・写真15）

22はSP17出土の土師器皿である。推定口径24.4cm、底径4.7cm、器高1.7cmである。体部は底部との境界で屈曲し、内湾しながら立ち上がる。口縁部は上方に摘み出し、端部は丸く収める。内外面とも回転ナデを施す。底部は回転糸切り。色調は橙色を呈する。

23はSP148出土の土師器杯である。口縁部を欠損し、底径6.0cm、残存高2.8cmである。体部は直線的に立ち上がり、器壁が薄い。内外面は回転ナデであるが、底部内面には強い回転ナデにより同心円状の凹凸が明瞭に残り、体部と底部の境界にはヘラ状工具先端を押しつけたとみられる沈線がめぐる。底部は回転糸切りである。焼成は良く焼き締まり、硬質である。色調は黄白色を呈す。

24・25はSP01出土の土師器杯である。24は口縁部を欠損し、推定底径5.6cm、残存高1.6cm。体部は内湾しながら立ち上がり、器壁は薄い。内外面は回転ナデであるが、底部内面には強い回転ナデにより同心円状の凹凸が明瞭に残る。底部は回転糸切り。

焼成は良く焼き締まり、硬質である。色調は白色を呈す。25は口径10.0cm、低径5.0cm、器高2.7cm。体部は内湾しながら立ち上がり、器壁は薄い。内外面は回転ナデを施す。胎土に細砂および赤色粒子を含む。色調は白色を呈す。26はSP25出土の土師器杯である。口径14.3cm、底径6.4cm、器高4.1cm。底部と体部の境界が明瞭で、体部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸く収める。内外面は



写真14 SP25遺物出土状況



写真15 SP46遺物出土状況

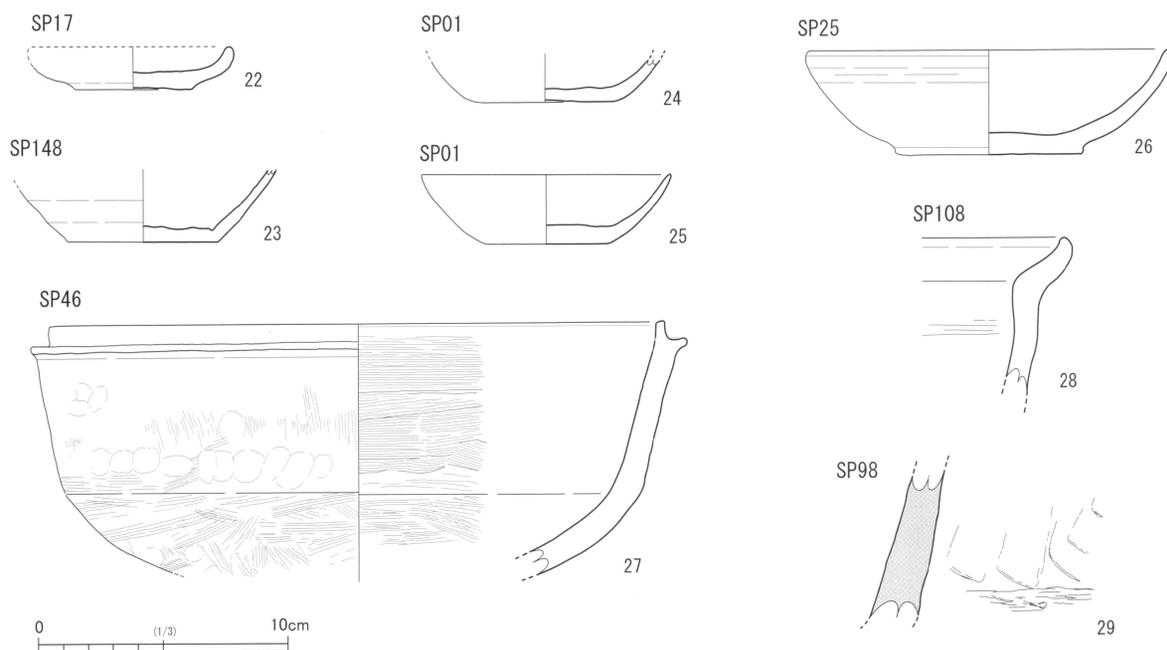
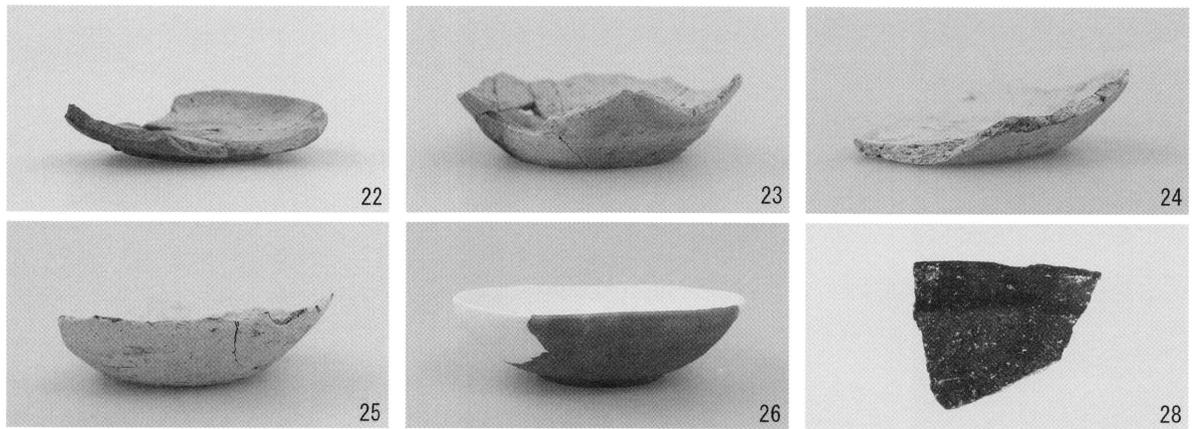


図10 柱穴出土遺物実測図（1/3）



※写真の遺物番号は、実測図の遺物番号に対応。

回転ナデを施す。底部は回転糸切りである。色調は橙色を呈する。27はSP46出土の土師器鍋である。口径24.4cm、鏝部幅1.3cm、残存高9.8cm。体部下半は内湾し、中位から直線的に立ち

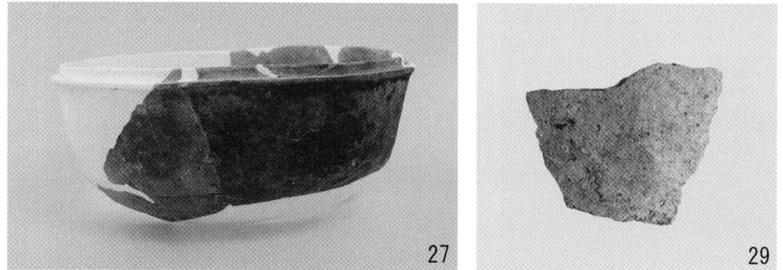


写真 16 柱穴出土遺物

上がる。鏝の張り出しは明瞭で、口縁端部は方形に収める。内外面ともヨコハケを多用するが、外面には指圧痕も多くみられる。砂粒が少なく、精良な胎土である。外面に煤が顕著に付着するが、色調は浅黄橙色を呈する。28はSP108出土の土師器鍋の口縁部片である。推定口径30.6cm、残存高6.0cm。口縁部は外に屈曲させ、端部は上方に摘み出し、丸く収める。内面は体部上半がヨコハケ、口縁部内面はナデを施す。外面はナデで、指圧痕もみられる。胎土に砂粒を多く含む。焼成は良く焼け締まり、硬質である。色調は内面橙色、外面黒褐色を呈す。外面には煤が顕著に付着する。29はSP98出土の備前系陶器甕の体部片か。内面は回転ナデ、外面は基本的にタテ方向のケズリと考えられるが、破片下端にはヨコ方向のケズリが施される。底部に近い体部破片であろう。

### (3) 包含層出土遺物 (図 11・写真 16)

30は9384グリッドの包含層上面検出時に出土した滑石製形代である。長さ11.1cm、幅4.3cm、厚さ1.3cm、重さ114.5gである。

滑石製石鍋の体部を横方向に利用している。内面の研磨や外面の縦方向のケズリは石鍋製作時の加工痕である。また、外面には煤の付着も顕著である。側辺部および両端部に形代製作時の鋭利な工具を用いたケズリを施し、一端には溝状の切り込みを施している。類例に乏しく判然

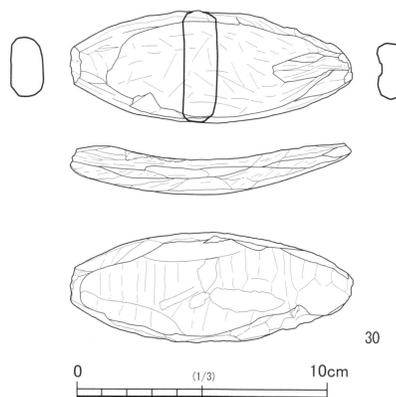


図 11 滑石製形代実測図 (1/3)

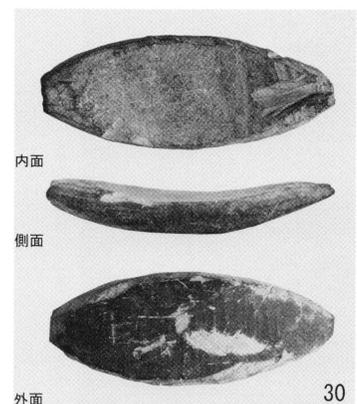


写真 17 滑石製形代

としないが、その形状や本遺跡の既往の調査成果に照らして、舟あるいは陰物を模造した祭祀遺物と考えられる。なお、実測にあたっては舟と解釈し図化している。

## 5. まとめ～長門西部地域の中世土師器編年によせて～

ここではひとまず、遺構出土資料となるSK 01とSK 02出土の土師器について検討し、今後の長門西部地域の中世土師器編年を考える上での参考資料を提示することで、まとめに替えたい。検討にあたっては後で触れる豊北町上ノ山遺跡および瀬戸遺跡における毛利恒彦氏の考察（毛利 2006a・b）を参照しつつ、筆者なりの見解を述べたい。

表1は両遺構出土の坏・皿の法量分布である。SK 01の坏は口径15.0 cm、器高4.0 cm付近にまとまり、皿は口径7.5～9.5 cm、器高1.5 cm付近に収まる。対して、SK 02の坏は口径11.0～14.0 cm、器高3.0～3.5 cmのなかに収まり、皿は口径6.8～7.5 cmに収まり、器高はほぼ1.1 cmである。SK 01の皿、SK 02の坏に法量のばらつきがみられるものの、法量および形態の特長から両遺構における時期差は明らかであり、SK 01がSK 02に先行することが理解される。

さて次に、SK 01出土土師器を検討したい（図6）。SK 01の坏は法量的には口径が16.3 cmを示す8以外は口径15.0 cm、器高4.0 cm付近でまとまりは良い。形態的には6のように体部が内湾気味に立ち上がるものと、5・7・8のように直線的に外に開くものの二形態がある。また、5と7は口縁部を外に屈曲させる形態的類似がみられ、7と8は底部内面中央を凹ませる押圧静止ナデや底部外面の板目痕など調整技法は極めて類似している。したがって、7に5と8の各属性が備わっていると評価できることから、SK 01出土の坏は時期的にまとまりのある資料と捉えることができよう。皿についても口径が7.7 cmを示す1以外は口径8.6～9.3 cmでありこれも法量的にはまとまっている。形態的には、体部が直線的に立ち上がる1、体部の立ち上がりがくびれ体部に段が付く2、体部が内湾気味に立ち上がる3と4の三形態が認められる。このうち、3の底部外面には坏でもみられた板目痕がみられる。なお、坏・皿ともすべて橙色系土師器である。

それでは、このような特徴を有するSK 01出土土師器の編年的位置はどのように捉えられるであろうか。表1に示される破線は小南裕一氏の編年案（小南 2004）I～V bの各期に相当する法量範囲である。これに従えば、SK 01の坏・皿は法量的にはI期ないしII期の範疇となるが、坏・皿ともすべて橙色系であることや10・11の龍泉窯系青磁碗I類の出土からひとまずII期に相当すると考えて差し支えなかろう。さらに、8が他の坏に比べひとまわり大きく、法量的にはI期にも属さないことを考慮すれば、ここでの土師器の在り方はII期におけ

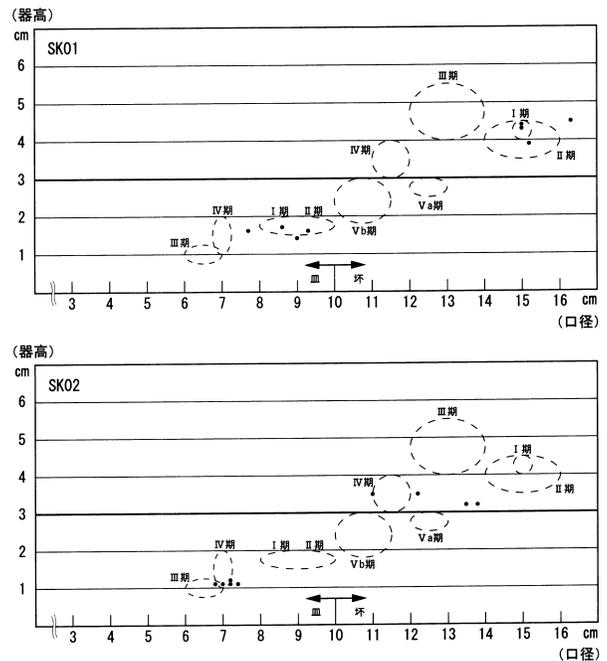


表1 SK 01・02 出土の土師器坏・皿法量

る古相ないしは法量分化を示している可能性がある。

次にSK 02出土の坏・皿についてみる(図8)。皿は法量的にはすべて口径6.8～7.4 cm、器高1.2～1.1 cmに収まり、良くまとまっている。形態的にもいずれも体部が内湾気味に立ち上がるタイプで大差はない。一方、坏はいずれも器高が3.3 cm前後を示すものの、口径が11.0～13.8 cmの範囲に散在するため安定した法量値を示さない。なお、色調はいずれも橙色ないし浅黄橙色を呈す。

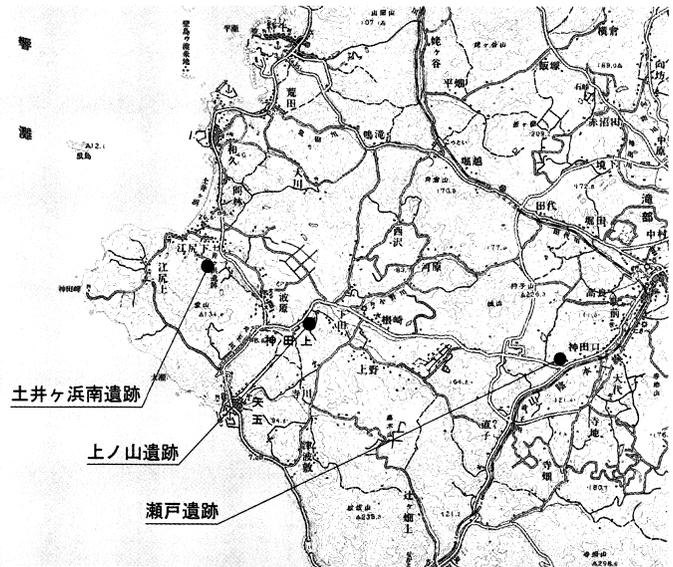


図12 上ノ山遺跡と瀬戸遺跡の位置(1/50,000)

さて、このような特徴を有するSK 02出土土師器をSK 01同様に小南編年の法量に照らせば、皿はIV期で捉えられそうな位置に分布し、坏は18・19のようにIV期に近いものと20・21のようにどの時期にも属さない資料<sup>4)</sup>が認められる。遺構におけるこのような在り方については同時期における法量分化や系譜差、あるいは混入によって異なる二時期の遺物が存在するなどいくつかの解釈が可能であろうが、その点についてはひとまず保留し、20や21といった小南編年に該当しない資料の時期的な位置づけについて、豊北町域の土師器様相を踏まえながら筆者なりの視点を提示しておきたい。

SK 02出土の坏20・21を評価する際に参考となるのが、土井ヶ浜南遺跡と同じく豊北町西部に位置する上ノ山遺跡と瀬戸遺跡である(図12)。表2は両遺跡から出土した土師器の坏・皿の法量分布である。まず、上ノ山遺跡についてみると、坏の口径が13.0 cm前後、器高3.5 cm前後にまとまりが認められ、皿は口径8.0 cm前後、器高1.0 cm前後にまとまりがみられる。また、瀬戸遺跡は坏の口径が12.0 cm前後、器高3.5～4.0 cmのあたりにまとまりが認められ、皿は口径7.0 cm前後、器高1.0 cm前後にまとまりがみられる。ここからまず指摘できるのは上ノ山遺跡から瀬戸遺跡への漸次的な法量の縮小化である。さらに、図13に示した両遺跡の坏の主体型式を比較すると全く異なる型式であることがわかる。このような違いは単に坏の系譜が異なるだけでなく、<sup>5)</sup>明らかに時期差が存在していると考えてよからう。また、このように遺跡単位で土師器法量をみれば、現状の豊北町域の資料には小南編年では捉えられない資料群が存在することがより理解されるのではなかろうか。

以上を踏まえて、土井ヶ浜南遺跡SK 02出

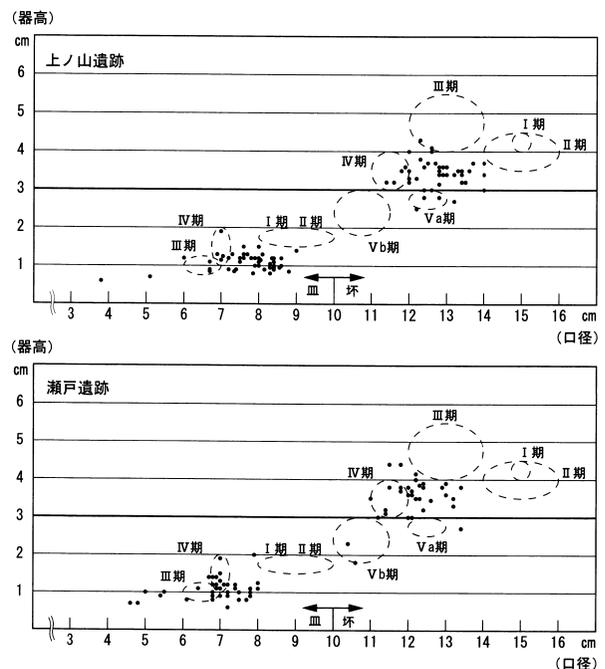


表2 上ノ山遺跡と瀬戸遺跡出土の土師器坏・皿法量(毛利2006aの第25図および2006bの第18図を一部改変し作成)

土の土師器の位置付けを模索してみよう。S K 02 出土土師器を単純に法量や形態で比較した場合、20・21の坏は上ノ山遺跡の主体型式に類似し、18・19の坏は法量的にⅣ期に近似することが指摘できる。さらに、20の坏は微砂粒を多く含むうえ砂粒の剥落が著しく、器面に微細な穴が目立つ極めて特徴的な胎土をもつ。このような胎土は、器種は異なるものの上ノ山遺跡の皿に定量的に認められ（毛利 2006）、今のところ豊北町域では上ノ山遺跡に限った特徴である。そのため、20の坏は上ノ山遺跡と時期的に重複する可能性が高いと考えられる。

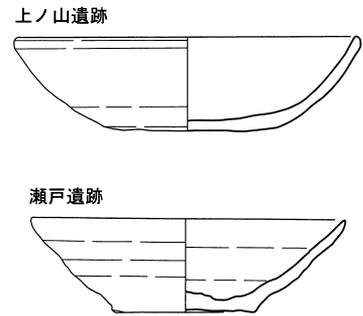


図 13 上ノ山遺跡と瀬戸遺跡の坏型式 (1/3)

さて、このように理解されるS K 02 出土土師器の位置付けであるが、まず18・19を法量的にみればⅣ期の範疇で理解することも可能かもしれないが、形態的に坏B-1よりも坏A-1との類似傾向が示唆されるため、瀬戸遺跡の坏<sup>6)</sup>や小南氏がⅣ期に位置付けた豊北町上太田遺跡S K 5などと同時期とみなすのは消極的になる。また、上ノ山タイプの坏に近い20や21は、表2で示されるようにⅣ期に近似する瀬戸タイプの坏に先行すると考えられるため、S K 02 出土の坏20・21はひとまずⅢ期の資料として評価できるのではないだろうか。<sup>7)</sup> その場合、少なくとも豊北町域では小南編年Ⅲ期に相当する資料群として坏A-1が安定的に存在している可能性が高く、法量的には口径はⅢ期のB-1と同様であるものの器高は3.5 cm前後でかなり低いと考えられる。先述のとおり、S K 02 出土土師器については今回の調査成果から18・19と20・21の同時性を判断することは難しく、これ以上の時期的な位置付けは困難である。したがって、必ずしも安定した資料として扱うことはできないが、当地域の中世土師器の地域性を抽出することを意図した場合においては重要な情報を備えていると判断し、敢えて分析を試みた。この視点が妥当なものかは、今後の山口県における中世土師器研究の進展に委ねたい。

さて、今回の検討を通して少なくとも豊北町域には小南編年に該当しない資料群が存在していることを示唆する結果となったが、これは多分に地域差が介在しているからであろう。つまり、毛利氏や種浦加代子氏も指摘（毛利 2006b・種浦 2006）されたように、小南編年は基本的に一定の蓄積がある長門西部地域の資料を軸に編まれたものであるが、Ⅲ期については良好な資料に恵まれず、長門北部や東部に位置する萩市（旧むつみ村）岡田・江良遺跡S K 15や宇部市（旧楠町）旦ヶ原遺跡S K 15など、地理的に最も隔てた資料を充てたことに要因があると考えられる。小南氏の編年案を長門西部地域に限ってみれば、Ⅲ期以外の相対編年の方向性は妥当なものと考えられ、今後長門西部地域でⅢ期の良好な一括資料が得られれば当地域の相対編年の骨子はほぼ固まると思われる。なお、このような地域差の問題についてはすでに小南氏自身も先の論考において十分認識されているところであり、<sup>8)</sup> ここに今後の山口県における中世土師器編年研究のひとつの方向性が見出されていると考えている。

以上、S K 01・S K 02 出土土器について検討した。本来はならば、これを踏まえて遺構や遺跡の性格について検討すべきであるが、すでに与えられた紙幅に達したため、後述することができない。自身としては豊北町域における中世集落の動態を明らかにする必要性を強く感じている。至らなかつた本遺跡の性格についてはその際に改めて検討することを誓って、終わりとしたい。

## 註)

- 1) ここでいう第5次調査とは、平成15年度に寺ヶ浴遺跡および広田遺跡として調査された調査区(有福編2005)を指す。これらの遺跡は、土井ヶ浜南遺跡として調査された第1～4次調査区と同一丘陵に位置する遺跡であり、遺構・遺物の分布状況をも、個別遺跡として分かつことは本来の遺跡実態を把握する上で支障をきたす危険が大きかった。そのため下関市教育委員会では、山口県教育委員会による遺跡地図情報改訂(平成18年3月付け)を契機に、これまでの学史的背景もふまえた上で、土井ヶ浜南遺跡として遺跡名称の統一を図った。
- 2) 平成14年度に調査された松成遺跡第2地点および江尻田中遺跡、平成15年度に調査された河原田遺跡(種浦・毛利編2005)を包括している。1)と同様の理由で、松成遺跡として平成18年3月付けで遺跡名称の統一を図った。
- 3) 小南氏はⅠ期とⅡ期を区分する要素として坯の色調がほぼ橙色系であることや龍泉窯系青磁Ⅰ類の共伴などを指標としている。
- 4) 同様の指摘は、すでに毛利恒彦氏によって行われている(毛利2006b)。
- 5) 小南氏の分類に従えば上ノ山遺跡の坯をA-1、瀬戸遺跡の坯をB-1の系譜として捉えられる。
- 6) 表2で明らかのように、瀬戸遺跡には長門国府忌宮LW001を基準資料とするⅣ期で捉えられる資料(口径11～12cm)も存在するが、主体型式はSK04に代表される口径12.0～12.5cmのものであるため、法量的に一致しているとするには消極的になる。このような在り方が時期差によるものか豊北町域の地域的特徴によるものか今後検討する必要がある。なおこれについて、毛利氏(2006a)はⅣ期古相の可能性を示唆している。
- 7) Ⅲ期について小南氏は、坯はB-1のみで構成されるとしつつも、この時期の資料には共伴資料がなく、今後編年の位置付けが変化する可能性を指摘されている(小南2004)。また、18・19と20・21に同時性が認められるのであれば法量分化の可能性もあるし、二時期にわたる資料が混在しているとすれば20・21を古相、18・19を新相として将来的に細分される可能性もあろう。
- 8) 小南氏は「長門国」というきわめて広い範囲の土器様相を同一視して論を組み立てた。しかし、資料を実見していくうちに小地域ごとに土器様相が異なっていることを認識し、距離を隔てて出土した資料間の関係が、時期差なのか地域差なのか扱いに苦慮したことがあった。今後資料が充実すれば、各「郡」単位程度での編年を組み立て、その成果をつなぎ合わせて「国」単位の編年を完成させるのが望ましい手法であろう。」と自らの編年案の問題点を明確に示しておられる(小南2004)。筆者としても今回のささやかな検討を通してではあるが、この指摘に全面的に同意しておきたい。

## 【参考文献】

- 有福史博編 2005 『寺ヶ浴遺跡 広田遺跡 磯地遺跡』下関市文化財調査報告書9 下関市教育委員会 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
- 有福史博編 2007 『波原遺跡 森広遺跡 片山遺跡』下関市文化財調査報告書25 下関市教育委員会 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
- 沖田健太郎編 2005 『切畑遺跡』下関市文化財調査報告書5 下関市教育委員会 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
- 小林善也編 2005 『宮ノ下遺跡 神田遺跡』下関市文化財調査報告書8 下関市教育委員会 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
- 小林善也・沖田絵麻編 2007 『片瀬遺跡 干焼田遺跡』下関市文化財調査報告書24 下関市教育委員会 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
- 小南裕一 2004 「長門地域の中世土師器編年試案」『上太田遺跡 市の瀬遺跡 南ヶ畑遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第45集 山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第31集 山口県埋蔵文化財センター 豊北町教育委員会
- 鈴木 卓編 1992 『土井ヶ浜南遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第147号 山口県教育委員会
- 鈴木 卓編 1993 『土井ヶ浜南遺跡Ⅱ 松成遺跡』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第9集 豊北町教育委員会
- 種浦加代子編 2004 『松成遺跡第2地点 江尻田中遺跡』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第30集 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
- 種浦加代子・毛利恒彦編 2005 『河原田遺跡』下関市文化財調査報告書10 下関市教育委員会 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
- 種浦加代子編 2006 『古殿遺跡』下関市文化財調査報告書17 下関市教育委員会 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
- 古庄浩明 2000 『土井ヶ浜南遺跡Ⅲ』山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第19集 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
- 毛利恒彦 2006a 『瀬戸遺跡』下関市文化財調査報告書13 下関市教育委員会 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
- 毛利恒彦 2006b 『上ノ山遺跡』下関市文化財調査報告書15 下関市教育委員会 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
- 山本信夫・山本麻里子 2007 「山陰の出土貿易陶磁と傾向—集落における消費形態及び北部九州と日本海流通に関する基礎的検討」『波原遺跡 森広遺跡 片山遺跡』下関市文化財調査報告書25 下関市教育委員会 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

---

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

## 研究紀要

第3号

発行年月日 2008年3月31日  
編集・発行 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム  
〒759-6121 山口県下関市豊北町神田上 891-8  
TEL 083-788-1841・1842

印刷 アリフク印刷株式会社  
〒759-5101 山口県下関市豊北町栗野 4896-8  
TEL 083-785-0311  
FAX 083-785-0312

---